学校研究全体について

1　研究主題について

・授業をしていく上で大切なことであり、大変勉強になった。

・他教科にひろげたことで、発表だけでいきづまっていた部分が探り出せたような気がする。

（自分も友達の考えを聞きたい、その聞いたことに対して自分はこう思うという部分）

・　伝え合うというテーマは児童の実態に合ったものになっていると思う。

・広がりを持たせたという点もよかった。＊＊　　さらに広がりを持っていければと思う。

2　研究内容について

・大切なことだと思います。

・子ども主体の授業をイメージして取り組めたと思う。

・どんな授業でも、「自分を持つ･伝え合う・ふり返る」を柱として組み立てられるので、今の南部小の実態やクラスの実態に対応できたと思う。

・　自分なりに消化して授業研にのぞんだつもりであるが、内容に沿ってできたかよく分からなかった。

3　進め方について

・全体での話し合いがもう少しあってもいいのではないかと思います。

（他のブロックになかなか出られない）

・一人１回の授業研究会でいい。（自習が多くなるので）

・ブロック研のまとめで話し合いの様子が分かりよかった。　＊＊

・自習の時間が少なくなり、たいへんありがたかった。

4　要望

・　ほとんどの学校で国語を学校研究にしているが、多方面から迫っていく必要がないのか考える。算数、理科離れ、体力低下などの実態がある中でそれでよいのか疑問である。

・　もう一回（1 学期末か 2 学期始まりに）全体会で方向性などについて勉強会をしたらよかった。

・来年も、ぜひ、全体とブロックとに分けてお願いしたい。

5その他

・事後研のまとめ、いろいろな指導をしていただきありがとうございます。

・ブロック研に半分くらいしか行けなかったのが残念だった。

・毎回、貴重な情報、ありがとうございました。

Topic 2-2

反省的実践家としての教師

教師という職業の専門性は，教育学や教育心理学等の学問で明らかにされた原理や技術を授業に適用していくことに熟達する「技能的熟達者」になることなのではなく，授業という複雑な問題状況に身をおき，経験から形成した知識を用いて授業実践を反省（省察：reflection）し，授業を創り出していく「反省的実践家」(reflective practicioner）になるところにあるという考え方が，1980年代後半からの教師教育で重視されてきている。この反省という概念は，デューイ（Dewey, J., 1933）により提示された。彼は，反省（省察）とは，他の論理的思考形態とは異なる特徴をもっており，実践状況に直接かかわる経験のなかで生じるためらいや困惑，疑問から成長し，このためらいや困惑を解決するために探求が行われ，判断や問題解決で終わる思考だとしている。

授業をしながら，また授業後にふりかえることが省察である。省察には3つの水準がある（秋田，1996b)。授業方法が目的達成の手段として，効果的であったか，いかにできたかを客観的に分析し考える「技術的省察」，その授業は教師や子どもにとってどのような意味をもったのかという個人にとっての主観的意味を解釈する「実践的省察」，どのような社会的制約や理念に基づいて，なぜこの教材をこの方法で教えたのかと社会歴史的文脈を考慮してとらえる「批判的省察」である。授業者が子どもだけではなく，自分の授業をさまざまな水準でふりかえり評価してみることが，よりよい授業を生み出す源となるだろう。

方から流れ出して衝突して，フィラメントが明るくなるという論理をもつ子はいなかったかなあ」と子どもの思考内容を推論しているのである。そしてさらに，1時間の授業を通して，子どもが教材について具体的イメージやモデルを一貫して形成できるよう授業が構成できているかどうかという点を考慮している。1時間の授業で行う活動や課題相互が緊密に関連しあって，子どもの教材への理解が深まっているかを考えているのである。